

530



特232
127

南洋千一夜物語

NANYO SENYA ICHIYA
MONOGATARI

仲原善徳著

日本書房



始



特232
127

仲原善徳著

南洋千夜一夜物語

日本書房版

南洋千夜一夜物語



著德善原仲

版房書本日



南洋千夜一夜物語

南洋千夜一夜物語

日本書局



長曾のボコバと者著

目次

南洋千夜一夜物語

(一)

母を亡くした國際兒・父の國の人々・日本仕込みのターザン・
ピリアンの少女・密林の歌・水中結婚・長崎から来た花嫁・野
性の愛

次

蠻人の神々

(六七)

寫眞目次

寫眞目次

著者と蠻人
典型的バゴボ人
マンサカの美人
マンサカ族の娘等
邦人の開墾
コーヒート
バゴボの樂器アゴン
大蛇と卵
名花ワリンワリン

生れた子蛇
バゴボ人の竹祭
マニラ麻
バゴボ人の武器
バゴボ族のある小舎
あるアタ族の空中住宅
ランソネス
ホロの前酋長
タピオカ
名花ワリンワリン
モーローの婦人

南洋千夜一夜物語

母を亡くした国際児

マドトム山とア赤山の附近から、北の方へ、又は南サランガニ灣の眞北ブルワンの湖の一帯、即ち中部ミンダオオは、現在のところではまだ未開の原始林である。

ダバオから西コタバトへの一線、ダバオから眞北ブキドノンへの一線、即ちダバオとコタバトの中央にあたるカバカンを中心地として東西南北への十字線は、文明人が折々物騒な飛行機を飛ばして、僅に天界から覗いてゐるくらいであるが、密林の中の住者たるアタやバゴ、ポ、ブルワン湖附近のミンダオオ・モーロー又はピリヤン人、チルライ人等の生活は全く知ることが出来ないのである。

ダグリブは、日本名前有川新作と云つた。ダグリブは、その母のサリサと共同族のモーロー一人からは、ダダ、ダダと呼ばれ、父の有川と共同國人からは、新作又は新ちやん、新公と



マサンカ族の娘等

呼ばれながら、十二の年まで、サラंगाニ灣の東北ブアヤンの部落で育つた所謂国際児であつた。

大體日本なんて何處にある國やら、父が何處から何うして流れ込んで来た人間であるか、そんなことは幼年ダダにはまだ深く氣にもならない、また無用な詮鑿であつた。ブアヤンの海岸で、小さな商賣をしてゐる父が、他のモーロー人をこき使ひ、酋長のやうな横柄な顔つきをしてゐるので、父はなか／＼強いんだと子供ながらも思つたものだ。

彼は山に行つては良をしかけて鹿狩る眞似したり、河に行つては鰐釣る遊びをしたり、時には、藤づるで蛇をく／＼つたりして暮した。モーローの青年達の仲間に交つて、刃を立木の幹に投げてあてる事や、十間許り先からの的に鎗を投げる事など、彼の少年時代の日はなか／＼面白いものであつた。

「偉いぞダダ！」

ダダがこの武道を練習する時には、伯父のサラマンなどが、ダダを褒めたり、叱つたりしてなか／＼指南するのだつた。しかし、小猿や蜥蜴を生捕つて來たり、又は小蛇を生捕つて

持ち歸つたりする時は、父は、顛顛に皺を寄せて鼻を引きつり、大きな眼を怒らしながら、
 「えい、又か！ 何度云ふても聞かないか、此モーロー奴！」
 とがなり付けたものである。

すると彼のかうした事から、いつでも父と母が喧嘩するのであつた。

「モーロー人の子はモーロー人でいいんだ」母のサリサがわめき立てると、

「何がいいんだ？ 日本人の子は日本人らしく育てるんだ」

父はそう唖鳴り、終ひには、父と母とが、燈のついたランプを投げ合つたり、刃を振り廻す事さへあつた。ダダリブは、母はなか／＼強いが、父も決して弱くはないんだと、靜に父母の鬭争の技術を眺めてゐるのが常であつた。

しかし、父と母とは、ふだんはなか／＼仲の良い夫婦であつた。父は母の親類を威服し、怠けものを叱り、貸金を責め立てる代りには、米とか乾魚をよく呉れたり、女には布地の値段をまけてやつたりするのであつた。

母は喧嘩の時は、賣り言葉に買ひ言葉で、モーロー主義を振り廻すのであるが、平生は、

日本人は偉いんだ、御前の父の國の人は皆偉いんだ、だから御前も今に父の國に行つて學校に這入つて偉くなるんだぞ、と教へる時であつた。

だが少年のダダには、學校と云ふ事が何であらうか、偉くなると云ふことが何であるかさへもはつきり知らなかつた。一日に、魚を數十キロ釣り上げたり、鹿を幾頭も捕つたり、生長したら山奥に行つて、マノボ人やバゴボと戦争して勝つこと位が志であつた。

ダダが十二才になつた時、母は病氣で死んでしまつたので、父は店をたゞみ、ダダを連れながら、山道傳ひにマリタの海岸に出て、そこから、大勢日本人の居るダバオの町に出て來たのであつた。

ダダは、そこで始めて日本人の有川新作として日本人の小學校につき出されたのである。ダダは、には死なれるし、ブアヤンのモーロー人の親類には別れるし、武道遊びの友達とは遊べなくなつて了つたし、ブルワンやカバカン等の奥地のアタやバゴボ等と戦争して、一時に十人や二十人も殺して見るやうなすばらしい望もなくなつた。ゴノー酋長のやうに百九十挺のボロをコンスタブラリー（警察）に取上げられるほどの劇しい戦争がやれる英雄にな

れる見込みも消えたかと残念になる時もあった。ゴノー酋長は、死んでも屍がなかつたそうだが、今ではそんな魔術も覚える事は出来ないであつた。

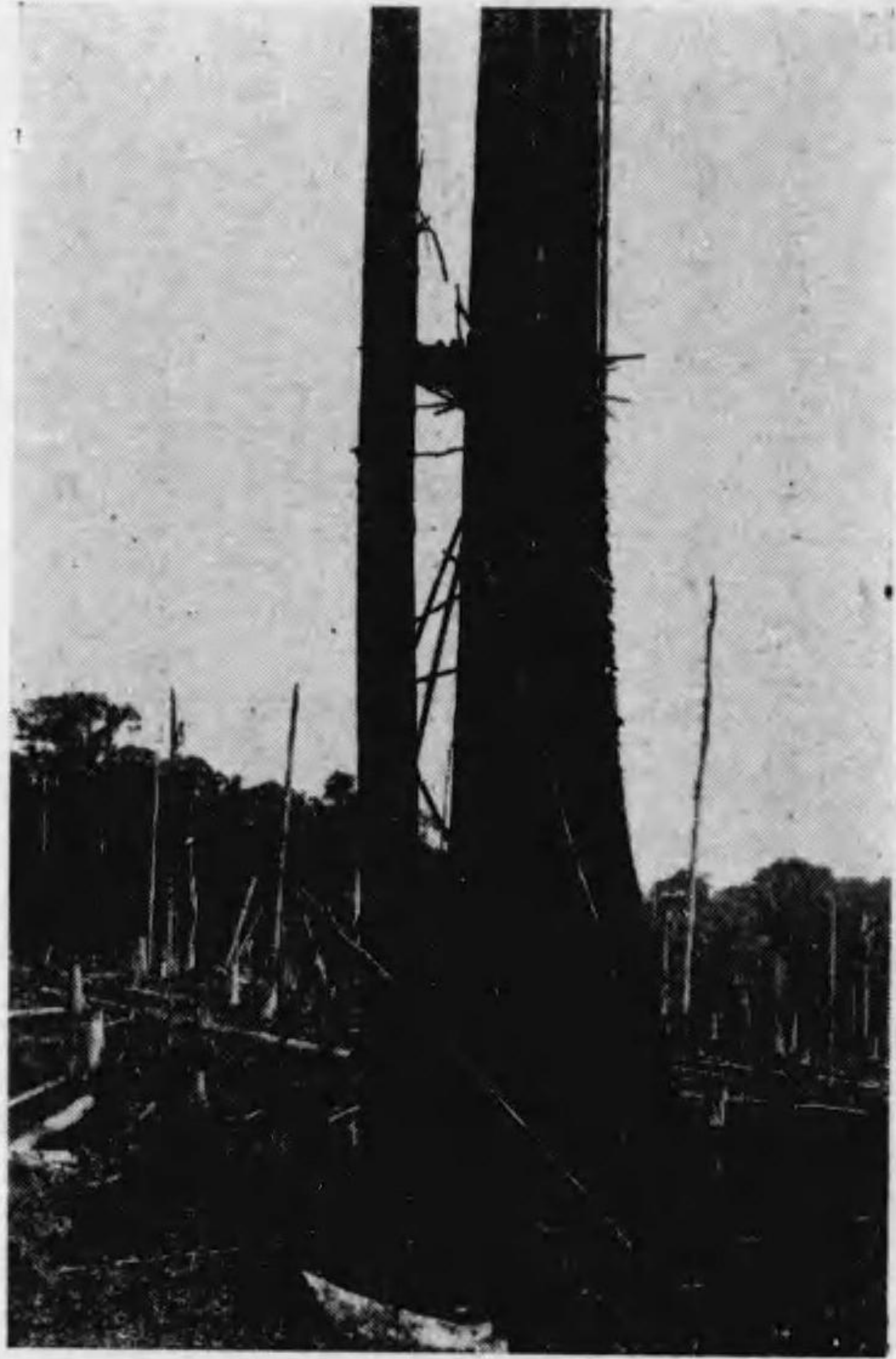
日本人の小學校に這入つて見ると、相撲だとかマラソンだとか、遊びの種類は全然モローも負かなかつた。しかし、授業時間になつて、きちんと言儀よく座らされて、何か分らない事を教へられるのは、なか／＼辛いことであつた。

「やい／＼モロー、モロー」

と馬鹿にする子供もあつた。

「何いっ！」

新作は、矢庭に立ち上つて行つて、ぼか／＼となぐり合ひつこをした。日本人の子供等も隅にはおけなかつた。なか／＼強かつた。二人三人東になつてかゝつて来る時もあったが、新作は容易に負かなかつた。しかし、モロー、モローと輕蔑される事は、いかにも残念でたまらなかつた。



邦 人 の 開 闢

「よし、おれが大人になつたら、ポロで澤山たゝつ切つてやるぞ！ 第一に日本人からたゝつ切つてやるぞ」

と深く決意する時であつた。が、矢張り味方の勢い彼は寂しかった。學課も次第／＼にわかるやうになつて来て、先生にも『有川新作』と呼ばれて、席に立上つて本を読み、黒板に字を書く時であつた。

父は、間もなく東海岸の麻耕地に行つて仕舞ひ、新作はダバオの父の知人の家に預けられて、そこから通學してゐたのであつた。だから尙更、新作は、時々ブアヤンのモーローの部落にゐた時を戀しがつた。

「ブルワンの附近では、女の子一人を五比で賣買してゐるんだ。マリタでもそうだ、マリタ邊では、あの邊のモーローがピンタ（丸木舟）に乗つて南方の島々から盗んで来た女の身長を計つて賣る。丁度掌の長さ一つが一比と云ふ相場で賣買してゐるんだ。全く野蠻つたらありやしない」

こんな話を時々大人等はしてワア／＼笑ふのであつた。そんな時、みんなの新作を見る

目はいかにも輕侮の意味を含んでゐるやうに思へて、彼には不愉快でたまらなかつた。

新作は次第にひねくれて行つた。何がな、自分一人が野蠻人扱ひにされてゐるやうで、除けものにされて居るやうで、子供ながら泣けさうなのをじつところへてゐるやうとすると、今度は青い焰となつて燃え上らうとするものがあつた。

「何が野蠻か？」

よし、大人になつたら、野蠻人になつてやるぞ。彼は、日本人の武士とラナオのダトーと何方が強いだらうかとも考へた。ホロのサルタンもなか／＼強い。そんな時ブアヤンにゐた時よく聞かされた話が思ひ出される。ラナオのダトーの部下も、なか／＼多數で、近在から儀式の時に集つて来るには、大名行列のやうに、幾竿かの旗を押し立てながら、鎗や楯を各々手にもち、アゴンをうち鳴らしてやつて来る。弓もあるんだ、弓では鹿や山豚などはその場で射止める事が出来る。もつとも、モーロー人は、豚なんかは狙はないが。

新作は、何だか時々自分が、ラナオの酋長にでもなつたやうな夢を描いていゝ氣持になることもあつた。モーロー人はピリヤンなどは皆奴隸に使ふ事が出来るんだ。又マノボヤマン

サカが、よし何十人來たつて、俺等のボロで皆んな叩ききつてやらあー。
 かうして、彼は、日本人ともモーロー人ともはつきり意識しないである間に、その周囲の
 環 境にしつくりしない、全く世界に國籍をも民族の籍をも失つた人間であるかのやうに、
 永久の憂鬱と反抗と共に育つてゆく人間であつた。

父の國の人々

父は東海岸から二ヶ月おき位にランチでやつて來た。彼の着更の洗濯物や、下宿料や小使
 をもつて來て、二三日泊つてまた去るのであつた。

父は來ると夜は活動寫眞に連れて行つて呉れた。あるときのことであつた。

「お父さんあれ似てゐるなー」

「何や？」

父は、きつい眼を見張つて唖鳴つた。メキシコらしいカーボーイの被つてゐる帽子を見て



樹 - ヒ - コ

新作は、西南部のモーロー人の帽子を思ひ出したのであつた。

「あんな野蠻人に何が似とる！」

「野蠻人て何んだねお父さん？」

「このど馬鹿たれ！ モーローヤカーボーイは野蠻じやないか！」

新作は悲しくなつた。しかし、決してひるまなかつた。モーロー人らしい血が、カツと頭に上つて来て、胸がどき／＼するのであつた。ふと、この時彼は死んだ母を思ひ出した。よろし、モーロー人を野蠻だと云つたなと云つて、父にぶつか／＼つて行つた母の聲を新作はすぐ耳朶のところでも聞いた。

「そんならうち野蠻かいなお父さん」

「このど阿呆！ 誰が手前を野蠻と云つたさ」

「うちモーローヤがな」

父は、厭がる新作を引き摺り立てながら小屋を出た。そして、家に連れて来てから、頭を二つ三つドシャ／＼となぐりつけた。

「ど阿呆が、ひんまがりくさりやがつて、根性がいつの間にもそんなに腐つたか」
他の人々は、この父子が何を争つてゐるのかさつぱり解らなかつた。だからピカドラをゆつくりと巻いて煙をふかしながら、じつと見てゐる人ばかりであつた。

「新ちやんどうしてお父ちゃんに怒られたんや」

新作は、黙つて涙一滴こぼさずに、眼をむいて周囲を見廻すのであつた。不逞な、慄悍なモーロー人的氣魄が、ありありとその顔に現れてゐるのが、誰にもそれとうなづかれた。

新作は、遂に父に連れられて東海岸の耕地へと引き上げる事になつた。勿論學校はそれきりになつた。そして間もなく、今度は日本に送らるゝ事になつた。

「おい、子供は夜は早く寝るもんだよ、早くあつち行つて寝つ！」

夜、父が麻挽のボホール人等と話したり、隣りの日本人等と酒飲んでゐる時など、ことさら大人の仲に割り込んで何かを聞いたがる彼であつた。大人の話といふものには、よく血をそゝる殺害事件や、女の話などが出て来るのであつた。新作は、十二であつたが、女といふものについてのことが次第に分つて来る頃であつた。

「うち野蠻人だからこゝに寝る」

わざと、自分の蚊帳を持ち出して來ながら、大人達の前で寝ようとして、父と取つ組む時さへもあつた。女手のない殖民地の家で、父は新作を充分に愛撫したり面倒みたりする譯にはゆかなかつた。

ボホールの労働者等は、新作を捕へては日本人の女に就いて猥な話などをして聞かせた。

「長崎に行つたらうんと別嬪がゐるぞ」

新作には、長崎と女とは、全然同じやうに考へられた。それほど度々聞かされたものだ。

長崎に行つたら、少女達が澤山居る。だから、早く長崎に行かう。そこで彼は父の知人に連れられながら、ダバオから船に乗り込んだのであつた。船は臺灣を廻つて長崎に着いた。そこから汽車に乗せられて、父の生家に行つたのである。

そこでは、見るもの聞くものが何もかも珍らしかつた。

「これはすばらしいぞ」

そこには、祖母や、伯父伯母などが澤山ゐて、よく彼を可愛がつて呉れた。そこで彼は小

學校に入れられ、勉強せい〜と云はれた。しかしそれも彼自身が彼等に珍らしい間だけであつた。

「こいつのお母さんは國違ひだ」

その家族の人々さへも時々こう謂ふのが耳に這入つた。それでも始めは國異ひと云ふ言葉の意味が彼にはよく分らなかつた。が、次第に、その國異ひと云ふ言葉が、一種侮蔑の響きをさへ新作の耳に傳つて來るやうになつた。

小學校の美しい女の先生や、近所の女の子供等さへもが、時々優しい聲ではあるが、

「新ちゃんのお母さんは國異ひですつてね？」

と云ふことがあつた。そんな時、新作は頭の中にボロでも突き立てられるやうに感じた。

彼は次第に自棄的に

「うむ、野蠻人や」

と答へるやうにたつた。

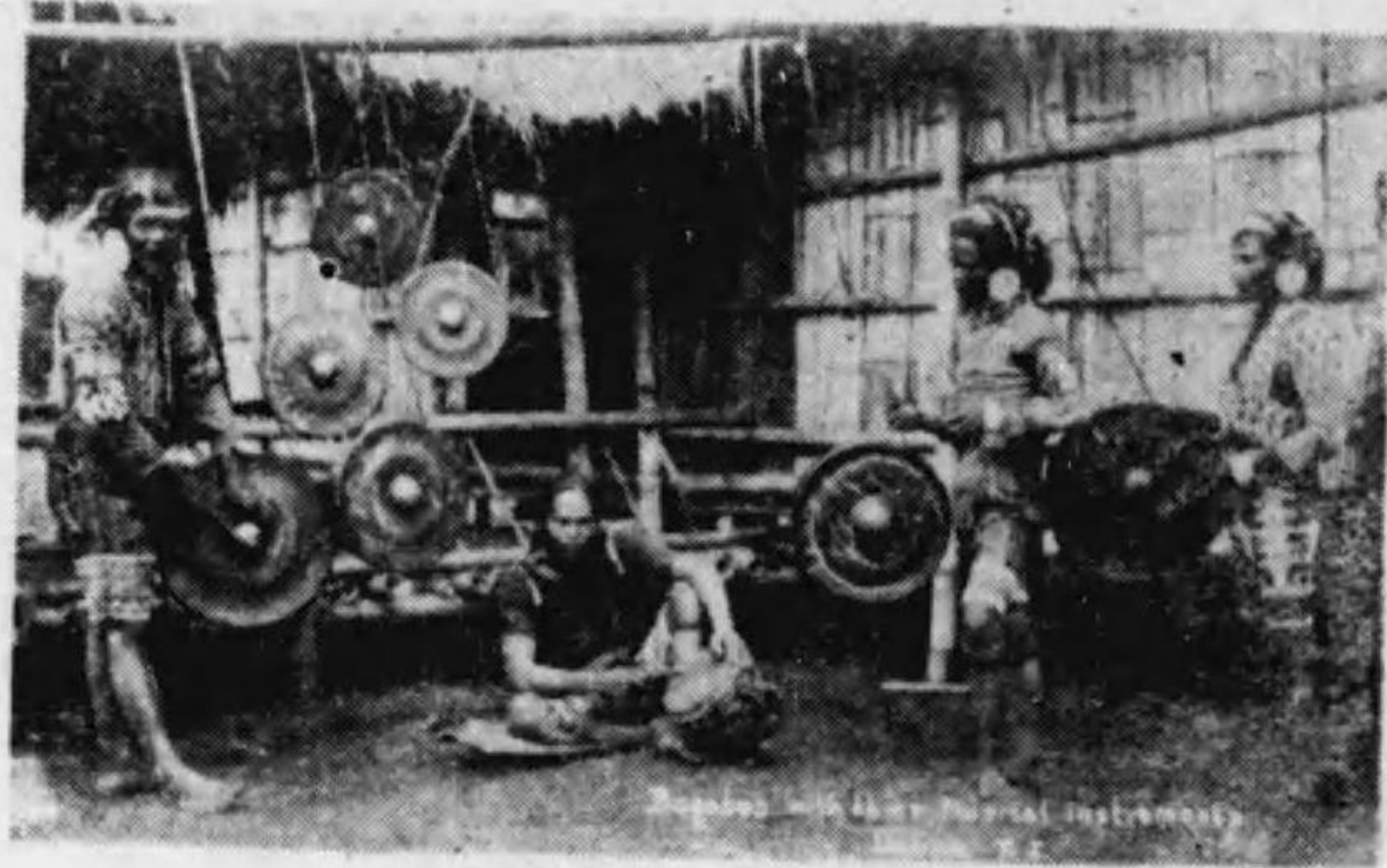
「おゝ、野蠻人、野蠻人！」

手をたゝいて、女の子等は嘸し立てた。そして、そこでは「野蠻人」といふ言葉は、いっしか彼の縛名として通用するやうになつた。彼のひがみは、彼の反抗は、この時から、又以前のやうに、いやもつと強い底力をもつて、はね返つて来るやうに見えた。それでも、ともかくも小學校を出て、中學校に通ふやうにまでなつた。中學校は大阪であつた。

しかし、新作はもう此頃から、神妙に學習する氣などは全然なくなつて了つてゐた。喫茶店や、活動寫眞や、いろ／＼の面白い遊び場所だけが、彼にとつての安息所となつた。

一番面白いのは、ダンスホールであつた。背長があり、混血兒としての顔容は、喫茶店の少女や、ダンスホールの女等の好奇心にうまく投じて、非常に歓迎されたのである。おまけに、新作の父は、小使をたつぷりと送つてくれたのである。

それでも、中學をやつと三年迄は修業することが出来たのであつたが、遂に不良といふマツクを押されて退學させられることになつた。彼は長崎に歸つた。父は立腹して、最早金を送つてくれなくなつたからである。しかし新作は祖母や、親類の者等を、片っぱしから強請して歩いた。



バゴボの樂器アゴ

「いよ／＼野蠻人の本性發揮や」

親類は、露骨にこう口々に叫んだ。

「そうや野蠻人や」

と彼自身も云つて、小双などを振りまはしては、親類や祖母を脅かしながら小使をせびるのであつた。

こゝでも、又、手も着けられない不良兒だと云ふので、遂にダバオに追ひ返されることになつた。

日本仕込みのターザン

新作は、それでも、ひとかどの立派な青年となつて、ダバオに歸つて來たのであつた。黒い髪は艶々として長くのばし、皮膚の色は日本的にかなり白くなつてゐた。逞しい體格、堂々たる歩みぶり、いかにも落ち付きと勇氣を備へたらしい、父親さへ見られるやうな若者となつて父の前に立つた。けれども、

「なんで金送らないんだ」

最初の言葉がかうであつた。父は、二度目の妻を郷里から迎へて、麻山耕地を擴張し、附近で雜貨の商賣にまで手をのばしてゐるのであつた。が新作の挨拶には流石の父も魂氣を失つた。

「何つう挨拶だそれは？」

「野蠻人だからなあ」

そして、着いたその日から、新作は鐵砲をもち出して、鹿や山鳩を撃ちに行つたり、近所の鶏を撃ち取つたりした。危く家の飼犬も彼に一發のもとにしとめられる處であつた。棒丸太を切つて來て、日本で習つた擊劍だと云つては土人の労働者を追ひ廻したりした。

可なり酒も飲むらしい。勝手に金もち出しては鬪鶏賭博に毎日曜をつぶしたり、ハイキングだと洒落こんでは三日がよりの野宿をしながら太平洋岸のマテの附近迄も行つたりするのであつた。

十日許り歸らないかと思つてゐると、北部のアタ部落を駈け廻つて、すばらしい金山を發見して來たなど云つて家の人達を驚かした。彼はアグサン、ミサミス等の方面を廻つて來たのである。

「俺は野蠻人だ。ターザンに負けるもんか」

彼は豪語するばかりでなく、實際に於て彼の野性と筋肉は、かのトリツクの多いスクリーンの上でのターザンにも決してひけはとらなかつた。彼が銀色の嵐に狂ふミンダナオのザングル地帯を駈け廻る壯觀については諸君の豊富な想像力にお任せする他はない。

「お父さん！ 俺が今に石油田を發見してやるよ」

彼はしみじみと云ふ時があつた。が彼の父は、

「お前にターザン以上の事何が出来るか」

と冷笑した。父はターザンは馬鹿男の事だとのみ勘違ひしてゐるやうだつた。

彼は、ダバオからアボ山とマトム山の中央目にかけて、冒険旅行もして見た。そして、行く行く多くのアタ部落を見舞つた。アタの奴等は、彼の姿を見ると一散に山の中に逃げ込むのであつた。ミンダナオの山の住者アタと云ふもの——特別にアタと云ふ種属はゐないやうだ。マンサカ、マンガヤ、マノボ、ピリヤン、チルライ等を總稱して謂ふのである。彼等はそれぞれ特別の風俗習慣をもつてゐる。が、モロヤバゴボには常に下風に立つて、彼等よりは遙に文化の程度が低い住民である。

「出て来い、出て来い、蛇を御馳走するぞ」

彼はズトンと一發ぶつ放してアタ共の度膽を抜いておいてから、口笛を吹くのであつた。

深山の中で、彼の銃聲は氣味悪く四方に轟き渉るのであつた。逃げのびて、大樹の蔭から覗

いてゐる奴等の動作を、彼は手に取るやうに知つてゐた。彼は、マノボでもマンサカでも、種々の異つた言葉を直ぐに會得する不思議な能力をもつてゐた。

「ノコノコ」と四方から、とかげの這ひよつて来るやうな奴等を鎮撫し、そして奴等を引き連れて蛇うちに出掛けたのである。彼等が、四方に散兵して間もなく、大蛇發見の合圖があつた。彼は、猪のやうに駆け寄つて行つて直ちに大蛇をうち止めた。凡そ、深山の住者のアタ等に取つて、蛇より美味なものはなかつた。

「女をつれて来た奴にはこれをやるぞ」

彼は、リユツク・サツクの中から、赤い布とマツチを出して見せた。アタ等に取つては、鱗と赤い布は、金銀と同じ價値あるものであつた。彼等は女を連れて来た。彼は、樹の蔭に女を連れて行つた。

「多少、蛇臭いぞ！」と彼は笑つた。

まるで、彼は王者のやうに振舞ひながら、ブルワンの湖の邊まで進んで行つたのである。

彼は道のない密林の中に道を見出すことを知つてゐた。恰も、都會の大道を走るがやうであ

つた。それは、そこらの原始人が、太陽の進む方向を基準として、樹の根又は枝などに切り付けておく符牒のやうな目印を、ちやんと知つてゐたからである。

彼は、なほ進んで、南に下り少年時代のいろ／＼の思出の残つてゐる故郷ブアヤンに行つたのである。彼が、摺摺し説明するまでは誰も、彼を昔のダダと思ふ者はなかつた。伯父サラマンは元氣であつた。そして彼がやつて來た事を喜んだ。彼は、そこで永らく遊んだ。昔のやうに、罌狩りも、ポロ投げも、いろ／＼のモーロー人の遊びを繰り返しながら日を過した。母はこゝで死んだ。生きてゐた日の母の思出をなつかしく思ふ彼であつた。それでも矢張りモーロー人で成人してゐたよりは、日本人で育つて來た事がよかつたとも思つた。だがモーロー人的な野蠻の精神がしつくりするやうであつた。

モーロー人等は、口々に尋ねたのであつた。

「ダダ！ どうだ日本は強い國か？ モロより強いか？」

「ラナウの湖より大きい軍艦が幾つも日本にはあるぞ」
それだけでモーロー人等の度膽を抜くには充分であつた。

「しかし、百位モーローのピンタ（獨木舟）が押し寄せると無論モーローが勝つだらう」
一人の昔の友が尋ねた。

「それは勿論の事さ」

大勢のモーローが賛同したのである。

「駄目だよ、ピンタなんて百千あつても大砲の音だけで引つくり返されるじやないか」
そこで、モーロー人等は悄然として了つたのである。昔、ホロの米兵を攻めて決戦した時でも、ラナウのコンスタブラリーと合戦した時でも、わがモーローはそれほど弱くはなかつたのである。敵が敵より少かつたり、欺しうちにされたり、兵糧攻めに合つたりして敗戦した迄である、だのに、大砲一發で、ピンタの百もひつくり返す力ある國とは、戦争は到底出來ないと観念する他はなかつたらしい。

新作は、昔の友人を二三人連れ出して、山上のダト（村長）の家に行つた。ダトの家には二三の馬がゐた。

「ダト、すばらしい馬があるな、一疋買はうか？」
 「お前女を幾つもつて来て代へて呉れるか」
 ダトは新作に反問した。これには、新作も參つてしまつた。交換物は金や労働でなくて、女であつた。

ダトは、五人の妻があつたが、外にも五六人の女が室内にうよ／＼してゐた。山上の住人のピリヤンの女等もそのハレムにはゐた。ピリヤン人等は、時々女を賣りに來るので、ダトは安い値で買ひ取つたり、米と交換して奴隸にして貯へて置いて、自分が不要の時には、家中の青年の妻にしてやつたり、遠方から來る客のサービスに出したりするのであつた。

いろ／＼の話の後に、ダトは、十四になるピリアンの娘が室の隅に跣つてゐるの指して
 「あれ御前未だ處女だよ、近いうち女にしてやつてから、うちの息子の嫁にする考へだ」
 ダトは平然としてゐるので、

「なる程これは野蠻だわい」

新作はから／＼と笑つたのである。しかし、すぐに、何が野蠻だと自問自答した。



大蛇

「野蠻なものか」

と彼は口の中で斷言した。それがほん
 とだ、日本の女だつて、みんな金で買へ
 るじやあないか？ 長崎にだつて、金で
 買へる女は澤山あらあ。親父の古を貰ふ
 手もあらうじやあないか。

「何がお前おかしいか？ 世界の人間
 はみんなそうなんだよ」

ダトは、新作が笑つたので、教へるや
 うにさう云つたのである。

「世界中とはよく云つたね」

新作は、又心の中でつぶやき乍ら笑つ
 た。

「御前等は野蠻人だぞ。すばらしい野蠻人だぞ！ だがそれでいいんだ」
と新作は、こぶしを空に振り上げた。するとこのすばらしい野蠻人達は、今に拳の中から何かの魔法が現れでもするかのやうに、一齊に彼の鐵拳を見詰めた。

ビリヤンの少女

南 洋 千 夜 一 夜 物 語

新作は、附近のビリヤン人等の小屋を廻つて歩いた。ビリヤンの生活程愉快なものはない。朝になると、バナナの葉は一尺ものび上つてゐるし、朝日が植物の肩を抱へて、ダンスでもするかのやうにすべての植物が躍動するのであつた。植物が目に見えてのび上ると、何萬の小鳥、鳩、鶯、啄木鳥等、いろ／＼の小鳥が生活の詩を朗吟するやうに鳴きわめくのであつた。數十の猿は一齊にバタ／＼と樹々の間を渡り歩いた。夜は夜で、小鳥に代つて、何萬かの蟲が鳴き出し、月光を浴びたバナナや檳榔、椰子の葉が、ちやうど劍戟のやうにきらめき合ひ、風が吹いて來ると大深林の無數の植物が一齊に、氣味悪い巨人軍の吠え狂ふや

うにゆれるのであつた。月のない夜が來ると、彼方の山、こちらの森の全ビリヤンが集つて來て、山の一隅で枯柴を盛んに燃やすのである。天も焦げよと、深山の中で燃やし立てる。そして、彼等は、火元から離れて各々散兵し、木の蔭やコゴンの中などにかくれてゐて、火をめぐり集つて來る獸類を、鎗と弓とでうち取るのであつた。

大てい、二三疋の鹿と、大蛇と、猪をうち取る事が出來た。ビリヤンは、モーローと違つて、猪を好んで喰ふのである。

そして、狩りがすんで、各々分け前をもつて小屋に歸つた後は、ビリヤンの少女が、上半身は裸體のまま、下には僅かにサロンを纏ひながら、軒の外に立つてゐるのであつた。彼等の風俗として、客人があると、必らず娘を侍らすのである。

「おい、こつちに入れ！ 何だビリヤンにもドレスがあるな」
新作は噴き出して笑ふのであつた。

ビリヤンは、モーロー人にさへ馬鹿扱ひされてゐる人種であるから、その野蠻ぶりも、なか／＼徹底してゐるわいと、新作は、ビリヤンの少女を抱きながら思つた。

ピリアン人は、鶏や卵とダソソネス（菓物）等を遠い海岸迄運んで行つて、日本人、支那人の店で食鹽、ドルセー（菓子）燐寸、赤い布等と易へて來るのであつた。近年に至る迄彼等には金銭の必要はなかつた。しかし、最近になつてやつとその利用を知つたのであるが、彼等のうちにはそれを數へ得るものさへまだ至つて少いのである。

彼等は各自に大きな竹筒をもつてゐる。その竹筒をもつて谷間に下り水を汲んで來て飲むのである。もし旅行でもする時は、山々に繁りはびこつてゐるビホコ（藤）の兩端をうち切つて、恰度吹矢で木の上の鳥をうつ様な格好をすれば、中から甘露に似た水がどくどくと出て來る。ビホコの水で飯を炊く事さへ出來るくらゐである。

新作も、ビホコの水は甘いと云つて、殊更にそれをピリアンの子供に云ひつけて、切り取らしては飲んだりした。椰子の樹は山の中では滅多になかつた。しかし、バナナや、カモテ（芋）ランソネス、バライ（陸稻）等はなか／＼美味であるし、たゞ、文明人の利器と食物ランプ、燐寸、砂糖、味噌、醬油、食鹽等に不自由するのみであつた。

ピリアンの小屋では、硝子の空瓶、ビスケットの空罐でも、なか／＼の貴重品であつた。



花名 リッワソリ

もし、ピリアン人に、ビスケットの空罐を示して、女房を貸せと云つても、奴等は喜んで貸すであらう。彼等はその空罐で、彼等の煙草入れ即ち檳榔樹の實と石灰と草の葉を入れるものにするのだ。この煙草入れ即ちピレ又はモーロー人はバタキヤと名付けてゐるが、これは南洋の馬來人のいかなる種屬を通じても貴重品として扱はれてゐるもので、多くは眞錫でつくられ、彼等の唯一の財寶なのである。その価格はなか／＼安くない。だから、ピリアンのやうな下級の蠻人には、なか／＼手に入れ難いものだ。

「野蠻だぞ！ だから面白いんだ」

新作は、奴等と交つてゐる間は、全く文明を

忘れてゐた。彼等は、白雲のたなびく空をさして、あそこはピリアン人の極樂だ、ピリアン人は死んだらあそこに行くんだと云つて自慢した。むかし、ピリアンのバナナの樹は、天まで届いてゐたのだと、何かの傳説見たいな事を全く眞剣に語り初め、そして、天にゐる神がピリアンを毎日監視してゐるんだと云つた。

「そうだ。天の神が御前等を見てゐるぞ。だのにどうだ、此頃海岸の日本人や支那人の店に行つて、盜賊を働き出したから、神は大變怒つて、飛行機をやつて御前等を叱り付けて居るんだぞ」

新作は、野蠻人を好きではあつたが、盜賊や卑怯な眞似は好きな方ではなかつた。彼等は飛行機を最も恐れてゐた。飛行機が時偶に空を飛んで行くと、彼等の犬もワン／＼と吠え、峰の上まで走り出して空の怪物に叫喚した。彼等の鶏もココツココツと挑戦した。猿も、枝から枝を傳ふて飛行機を追撃した。猪も密林の中で魂消て途方もなく突進するのであつた。

だが、ピリアンの奴等は、飛行機の音がすると、懸命に逃げかくれるのであつた。中には弓を持ち出して大空の怪物に向つて矢を放つものもあつた。そんな經驗をもつてゐるものは

新作から、飛行機に神が乗つてゐると聞かされて、耻ぢて下向いたのである。

夜になると、彼等の小屋は、木の實を串さしにした團子のやうなものを燃してあかりとするのであつた。それが、一本燃え盡きてしまうと、寝ることになるのであつた。

ピリアンの少女は、なか／＼執拗であつた。夜通し新作を寝かせなかつた。

「この有様では俺も若年寄になるぞ、ブアヤンのモロのダトから薬を買つて呉ればよかつた」

と新作は笑ひながらつぶやいた。

「薬はピリアンにもある」

十二か十三か知らないが——無論彼等に年を訊いたつて解りつこはないのであるが——ピリアンの娘は新作にあくる日さう教へるやうに云つた。

「おい、何の薬か？ 例の惚れ薬だらう、汚い、野蠻的のほれ薬の事か？ ピリアンの魔法なんて何にも利くものではないぞ」

「いや、ほれ薬以上の……」

「何？ ほれ薬以上の……」
 ビリヤンの少女は、新作にすり寄りながら、

「……………」

「……………」

「だから、ホロのモロのソルタン・キラムは、百人からの妻があるでせう。ブアヤンのダトも五人あるでせう」

「やり切れないな、野蠻人は」

と云ひながら彼は笑ひこぼした。太陽は密林の上に黄金色に輝いてゐた。鶴がギヤ〜と五六羽鳴いて空を飛んでゐた。

新作の胸は非常な恥ぢと悔ひる心で痛み出した。

「僕は未だ二十にもなつてないじやないか？ 野蠻だ、野蠻だ」

彼はその日ビリヤン人と訣れて、再び密林の中の旅を続けた。

密林の歌

密 新作は、海拔八千呎のマトトム山の火口近くまで登つた。ビリヤン人は、マトトム山に就いて莫迦げた傳説をもつてゐる。彼等は語るのである。

林 「マトトム山の火口は、コトバトの海につながつてゐる。そして、その中には、白い大きな鱐がゐる」と。

の 新作はおかしかつた。

歌 「誰がそんな白い鱐を見た奴がゐるか？」

尋ねても勿論誰一人として見たと云ふものはゐなかつた。ブサオと云ふ魔神の話聞いたり、コタバトの海濱で、モーロー人よりも遙に海の中にもぐり込む事の上手な日本人とあつたり、海賊が何處からか女を五六人引き連れて来て、五比選り取りだと叫び出すビリヤンの部落に行つて遊んだりした。

新作が一番おかしくて、且つ野蠻だと思つたのは、チルライ人の奴等であつた。ある夜、月蝕があつて、今まで皎々として密林の上に輝いてゐた月が次第にかげり出すと、彼等は「おゝ、やつて来た、やつて来た」

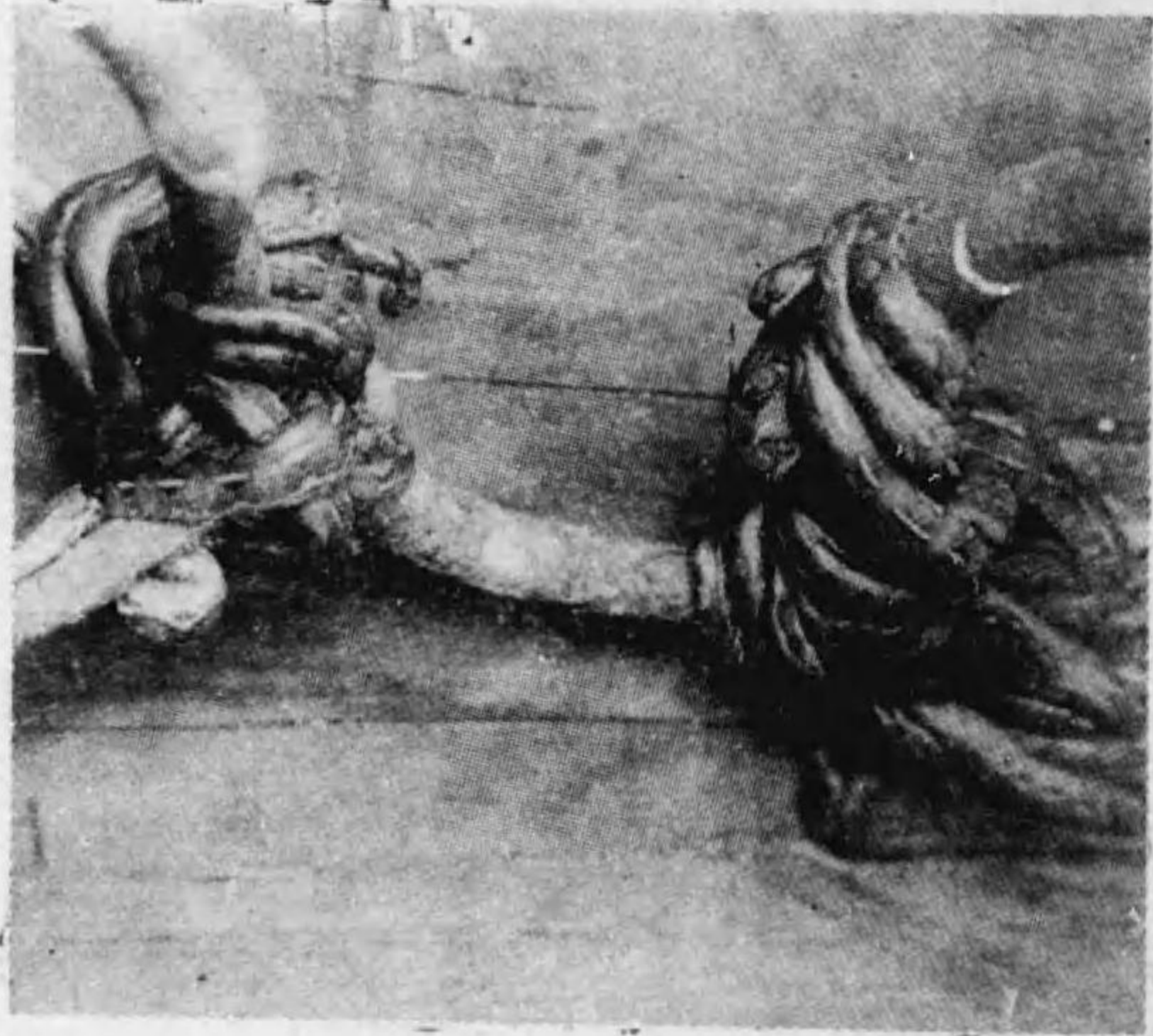
と、彼方此方の峰々山々谷々に小屋を建てて住んでゐるチルライの者等は、狂氣のやうに騒ぎ出した。魔神がやつて来たと言ふのである。

吹矢、弓、鎗が持ち出され、女子供は泣きわめき、男のある限りは死に物狂ひで、小高い場所に向け登るもの、何とも形容の出来ない呼び聲を出すもの、殆んど戦争騒ぎであつた。

「野蠻だぞ！ おゝい」

新作は、心の中では喜劇でも見るやうで愉快であつた。しかし、彼もなか／＼心配らしい顔で、そこらを飛び廻る眞似をしなければならなくなつた。暫く立つて、月がその明るい姿を出しかけた時、彼はピストルを一發ズトンと空に向けて放つた。深山の彼方に木魂が應へて、一種名状し難い莊嚴さであつた。

「魔神は逃げた」



蛇子たれ

チルライ人達は、やつと安心してそれぞれ自分の小屋へ歸つて行くのであつた。

彼は、バコボ人の酋長ゴノ一の勢力のあつた地方へも行つて見た。密林の魔人ダト・ゴノ一は酋長であり魔術を使ひ、大した勢力があつたのであるが、一九二五年、コンスタブラリーの營舎を襲撃して死んでしまつた。その後、マノボ人マンブラトが、自分は神であると稱して、密林一帯の人間の心をつかみ、白人や政府役人の掃蕩を企てたのであるが、

此怪物も亦平定されてしまつた。そのマノボ人のダト一の小屋にも行つた。そして新作は、マノボやマンサカ、マンガヤの連中が、なか／＼武士的であるのを愉快に思ふのであつた。マンガヤは、人の家を訪問する時、鎗を携へて行くのが常であるが、小屋の前まで来ると必らずそれを庭に突き立てて這入るのであつた。つまり、武装解除して入つて行くのである。しかし、ポロ（刃）は、なか／＼腰から放さない。應待の時には、右の手は何時でも刃の束を握れるやうに用心し、また他部落の者と會つて、會食でもする時には、常に右の手で刃の束を握り、左の手で食物をつかむのである。

しかし、家の中などでは、絶対に争鬭をしないのである。鬭争は、必らず屋外に限られてゐるのだ。屋外に出て敵味方の身仕度と位置が定まつてから、いよいよ始めるのであつた。一度、新作は、そのあはや鬭鬭かと云ふ場に立ち合つた。

それは新作が、ダバオのタグム河を上流に深く行つて、ブキドノンの境ダド一・バンタオのマンガヤ部落に行つた時であつた。何かの祝祭日の時であつたらう。マンガヤの家で、七八人の男と八九人の女が集つて、いろ／＼の料理をならべて宴會を開いた時であつた。

新作も、その家の客になつて、彼等と共に手製の酒を飲んだり、いろ／＼の野蠻的料理を手づかみでやつつけてゐたのである。

マンガヤの習慣として、酒を巡々に汲み交はして、料理を食べる段になると、一人が一人へと手につかんで口の中に押し入れるのである。

「おいやれよ！ 大いにやつて呉れよ」

ちやうど日本人が、コップの酒を、相手の首をつかまへながら嫌應云はさずに注ぎ込むやうなものだ。單純な彼等にとつては、相手の腹の中の工合だとか気分だとかはどうでもいいのだ。親愛の情が高ぶるにつれて、さまざまの品物を手につかんで相手の口に押し入れる代りに自分もまた相手から自分の口に入れて貰ふのである。

「ブラボー野蠻！」

と新作は叫び出し度い程であつた。彼も、無性に嬉しくなつて、一人二人と手づかみで交歡したのであつた。その中、どうしたものか、一人の男が一人の口の中に入れやうとした料理が、滾れてそこら中に撒き散らされてしまつた。一人は激情が高じ、一人

は馬鹿にされたと思つた感情の行き違ひでもあつたかも知れない。こんな聲が高くなつて怒り罵る形相が見る見る凄じいものになつた。その刹那である、今まで、亂座の無禮講であつたものが、忽ち、東西の席順が一定し、几帳面な全く儀式張つた座敷と變つて、そこには殺氣立つた陣形が調へられた。

そして、發言は、双方の長老二人のみとなつて、當事者二人は質問さるゝまゝに答へるだけであつた。兩方の、長老の談判も、次第／＼に、調子が高まり、最早理論闘争では納まらなくなつたやうに見えた。

彼等は外に出る事になつた。一人一人、戸口のものから、パツ／＼と庭先に出て、東西に分れて並んだのである。そして、双方の、主將が悠々として出て來た。そこで、又數言理論は繰り返された。アワヤ、血雨降り、肉弾相うつるの光景を演じそうな雰圍氣であつたが、間もなく和解の一致點を發見したものらしく、双を引き抜くまでに至らないで、再び睦み合ふことになつたのであつた。

この間の兩者の秩序立つた行動、統制、落ち付いた態度、新作はなか／＼愉快であつた。

中央ミンダナオのジャングルの中の勇者、文明の風を吸はない彼等にも、このすばらしい規律があつた。

「蠻人萬歳、俺は蠻人禮讚だぞ。卑怯、虚偽、欺瞞は、蠻人社會にはないんだ」

新作は中南部の旅行を終つて、恰も凱旋將軍のやうに、父の家に歸つて來た、彼はそして「野蠻人の歌」と云ふものを書くのであつた。

ジブシイー ジブシイー

俺やジブシイー

海のジブシイ

ジャングルのジブシイー

海で水蛇

河で鱔狩り

ジブシイーは蘇落の海の王者

ジブシイーはミンダナオの山の王者

ジブシイー ジブシイー

俺やジブシイ

山のジブシイ

アポの山の主

山で蛇狩り

ジャングルで女狩り

蛇の肉なら娘と代へやうか

娘の肉なら五比で賣らうか

ジブシイー ジブシイー

俺やジブシイー

ジャングルのジブシイーは

戦さに強い

アゴンたゝいて

鎗もつて来い

クリス引き抜き首かき取つて

マトトム山の罅になげてやる

彼は今密林を通つて来たやうな不思議な響をもつた聲で自分自身の出まかせな曲で歌ふのである。父はもはやサジをなげたか、黙つてふさぎ込んで聞くのであつた。

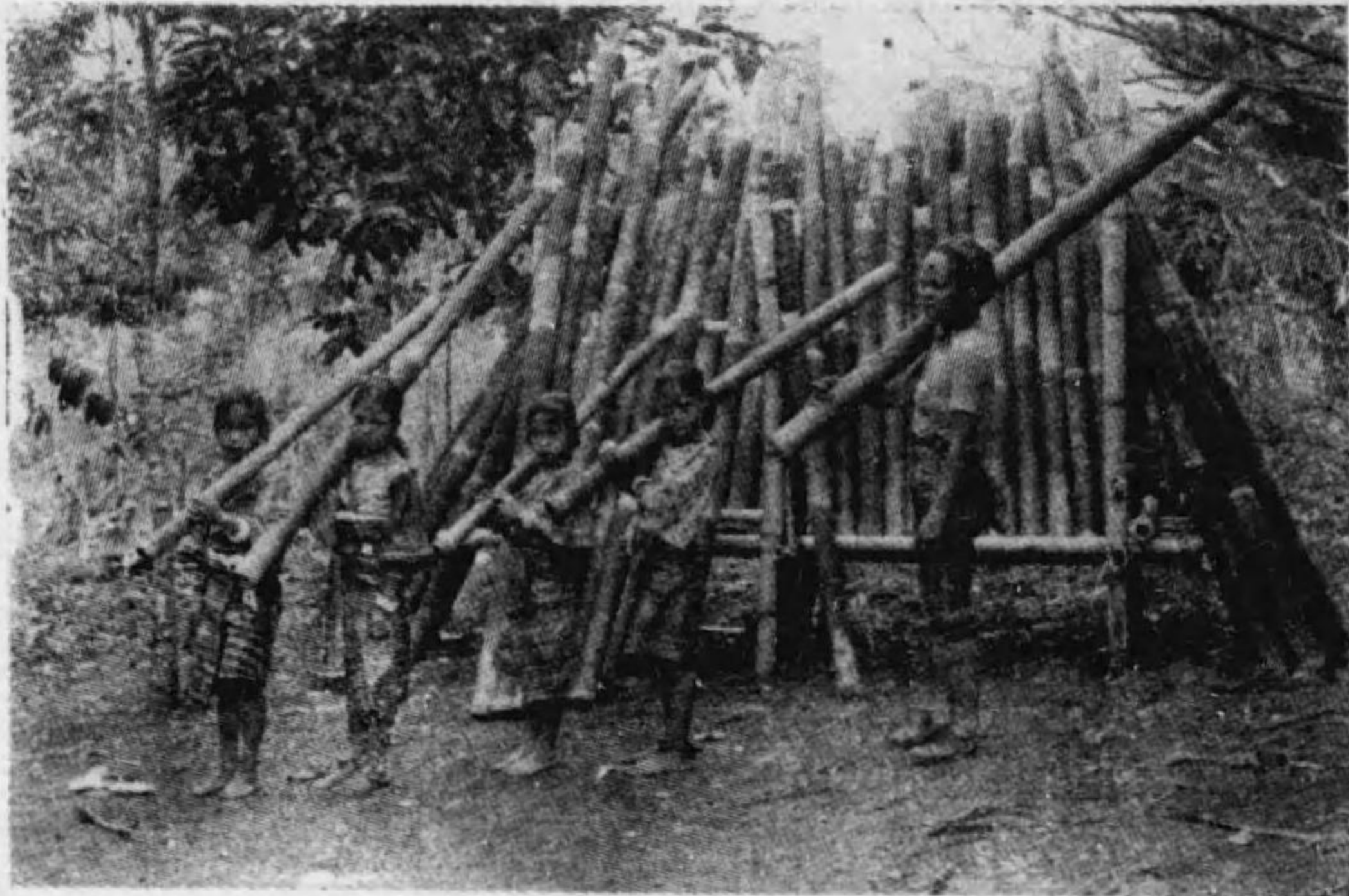
水中結婚

世紀の流れに置き忘れられ、文明の風から見棄てられ、あらゆる原始的、野蠻的、怪奇的なるものの温床である中南部のミンダナオ島の自然とそこに生活する一種の動物——人間の状態は、新作の心を強く打つたのである。彼にとつてはこの文明人が一律に輕蔑し去り、罪惡視する野蠻的なるものの陳列場は、都會のデパートメントストアーが、そこに集る婦人にとつて感激と讚美の山であるのと變りはなかつた。或は、動物園と植物園とがそこに集る兒

童等にとつてアミュージメントの場所であると同様であつた。別して、ミンダナオ島は、アフリカや馬來半島のやうに、猛獸が生存して居ない。それは、冒険家に取つては甚だもの足らない場所ではあるが、それだけにまた安心と愉快と、親しみをもつて、種々の遊戯に耽る事が出来るのであつた。

遊戯！ そう、何事も遊戯でしかないのだ。一夜のうちに一尺も植物の高さを背のびさせて見たり、電信柱に花を咲かして見たり、一本の細引で一問半の鰐を釣り上げたり、背だけ五寸を五十仙と評價して婦人を買つたり、楯と鎗とで武装させてチャンバラ陣を布いて見たり、ミンダナオのジャングルは、實に祕密の戯樂場であつた。

パラダイス！ パラダイス！ こゝは、こましやくれた文明人共の這入る可き場所ではない。願はくば自分一人の遊び場所として、このまゝ人外境として保存して置き度い。中部の密林地帯は、有川新作一人で統しめす可きところの王領地帯なのだ。ラナオのダトも、バゴボの酋長も、可愛らしい忠實なる俺の番頭でないか、猛犬をビスケット一つで御するやうに、マトトム山の白い鰐でも、ラオオ湖の赤い龍でも、引つ括る事が出来るではないか。天



バゴボ一人の竹祭

然と史蹟は保存すべきものだ！ 同様に、こゝはこのまゝに保存しておかねばならない。

彼はかつて長崎にゐた時、大阪にゐた時、國異いとか、野蠻人とかと云はれて、いつでも肩身の狭い思ひをして來た。しかし、ミンダナオの密林の中には、教育は勿論彼等の所謂國異いといふことからさへ解放された喜悦がある。屈托のない自由がある。禮儀とか、謙遜とか、社交とか、いろ／＼の風俗、習慣、道德にがんぢがらめにされてゐる文明社會

よりは、野蠻人にとつては野蠻人の巢の方が遙かに住み好い。おゝ野性の聲がいかに蠱惑的であるかよ。

猿が尻笑ひすると云つて、人間は、猿を笑ふが猿こそが人間にこう云ひ返してやりたいであらう。第一、猿は尻笑ひはしないじやないかと。人間は、自分等より高等なるものを笑ひ、自分等の祖先を嘲る。野蠻人！野蠻人の何處に野蠻的なものがあるか？バラバラ事件も、お定も、死刑も、賭博による殺人も、仇討も、このミンダナオには全然見る事は出来ないじやないか。ましてや、三原山のやうな自殺場所などは斷じてない。

三原山！文明人と云ふものは、他人が餓死するのを見てゐても、冷然として黙視する事の出来る冷血漢の代名詞なのか。それに比べてこの、蠻界の何處に食へないで自殺するものが一人でもあるか。

しかし、そんな理窟はどうでもいいのだ、人生到る處に青山ありで、どうだ、ミンダナオの密林にも到る處に花ありだ、チルライ人の女、バゴボの女、モーロー人の女、ピリヤン人の女等が、何處でも大手を廣げて吾々の來るのを待つてゐるではないか。

赤い灯、青い灯！の都會の女に比べて、これらは劣ると云ふのか？凡そ低級とは何ぞや、美とは何ぞや。美しくないものを美しくする爲めに白粉で化粧をする。ルージユで青ざめた唇を塗る。清純な心性を失つてゐるから嬌態を工作して男性を欺く——。あゝ野蠻がいぞ、野性がいぞ。あらゆるものは皆自然でないか、皆美しいのだ、自然なるものに美しからざるものなしだ。

新作は、少年時代に野蠻人と云はれ、蔑視され、抑壓された悲憤の經驗を持つてゐるが、今ならばかうした辯明と、野蠻人擁護の熱情を叩きつけることが出来たであらう。新作は、かつて南部の方に旅行した時、あるアメリカ人の小屋に休んだことがある。その時、そのアメリカ人は「ピリヤン人は英米人と同一人種だ」と云つた。

「ノー」

と、一言のもとに新作は反對した。アメリカ人は、天も割れよ、山も裂けよと云はん許りの聲を出して、手振り身振り、大口を開いて、

「ノー？ノー？如何して君はそう云ふんだ。君は知つとるか。君は何も知つてまい

が……」

と前言して彼は、ピリアン人の傳説は、希臘神話とそっくり同じだ。奴等は、己を幸福の象徴としてゐる。又奴等の言葉に「YES」と云ふのがある、あれは全く英語と同じ意味なのだ。其他澤山ある。だから奴等は昔の俺等の兄弟だつたんだと説明するのであつた。新作には、そんな理窟は何もわからなかつた。が、此アメリカ人が、汚いピリアン人を輕蔑せずに、昔の親類だと威張つてゐるところが愉快であつた。このアメリカ人は、ピリアン人と起居を共にして、ピリアンの少女を、妾のやうにしてゐるのも生理的に考へて不思議であつたが、兎に角、野蠻人として見下げないのが非常に好感がもてたのである。

又、そのアメリカ人は、

「どうだい兄弟！ 君もピリアン人の嫁をもたないか！ いいぞ、羊のやうに温順で、慾張りでなくて、何人妻をもつても文句は云はないし、そう何時でも云ふ事はきくし……」

と、そしてプツと吹き出して、

「そして小さくつてね……」



マ ニ ラ 麻

と、ハハハと、向ふ山の谷まで響せて大きく笑つたのである。新作は

「僕は日本人だ！ 日本人以外の女は妻とせん」

きつぱり答へたのである。新作は、日本人の前では、常に野蠻人であつたが、他國人に向つては、最も頑固な國粹派日本人であつた。

「だつて君隣のキヤムプに行つて見い。八人の日本人がピリヤンと結婚してゐるぞ、君は青年だから未だ何にも知らんだ」

と又そのアメリカ人は笑つたので

ある。

事實、新作は、結婚をするならば日本人と結婚せねばならないと考へてゐた。この考へだけは、彼の野蠻鼓吹とは矛盾があるやうに見へるかも知れない。が、それこそ彼が野蠻的であることをより明かにするものである。

ブアヤン方面のモーロー人の風習として、結婚の夜行はれるマグサツゴ、即ち、新郎新婦が水浴びしながら、男が泳いで行つて女を取り押へ、それを長老の家にかつきこんで始めて行はれる結婚のことも、嘗て聞いたことのない儀式であつた。しかし、それは、豫め結婚して、水牛、銀の煙草道具、檳榔の實と石灰入れ、象牙のクリス等の結納品を入れて、つまり、娘を買ひ取る約束の下になされる八百長の儀式に外ならない。

が、モーロー人らしい勇ましい結婚法は、二人が好き合つてゐる時、男の方に金がなく、或は両親の何れかゞ不賛成の場合、一年にたつた一回許されてゐるマグサツゴの日、それは必ず夕方の九時と定められてゐるのであるから、二人で謀し合はせて水浴に行き、色男が大々的スピードを出して女を捕へて、そして、長老の家にかついで行く。もしも、女の頑迷

な不粹な父親よりか一足でも早く長老の家に到着し得たら、若者は、この時戀の勝利者である。父親が、いかに反對しても、既に遅しで、モーロー人の規則は、戀愛者に特典を與へてゐるのであつた。

しかし、もしも娘の父親が、彼等の自由の戀愛者又は娘の代償をなし得ないプロレタリアの青年より先に長老の家に到着して居たならば、憐れむべし、これら金と力の無かつた色男は、モーロー人の嚴肅なる掟に従ひ、そこで直ちに首うち落とされるのである。

モーロー人結婚の場合に於ける「色男と金と力」の關係も面白いものであるが、新作にはこのことに關する深い心構へは無用であつた。何故なら彼は花嫁は矢張り長崎から貰はうと考へてゐるからであつた。

長崎から来た花嫁

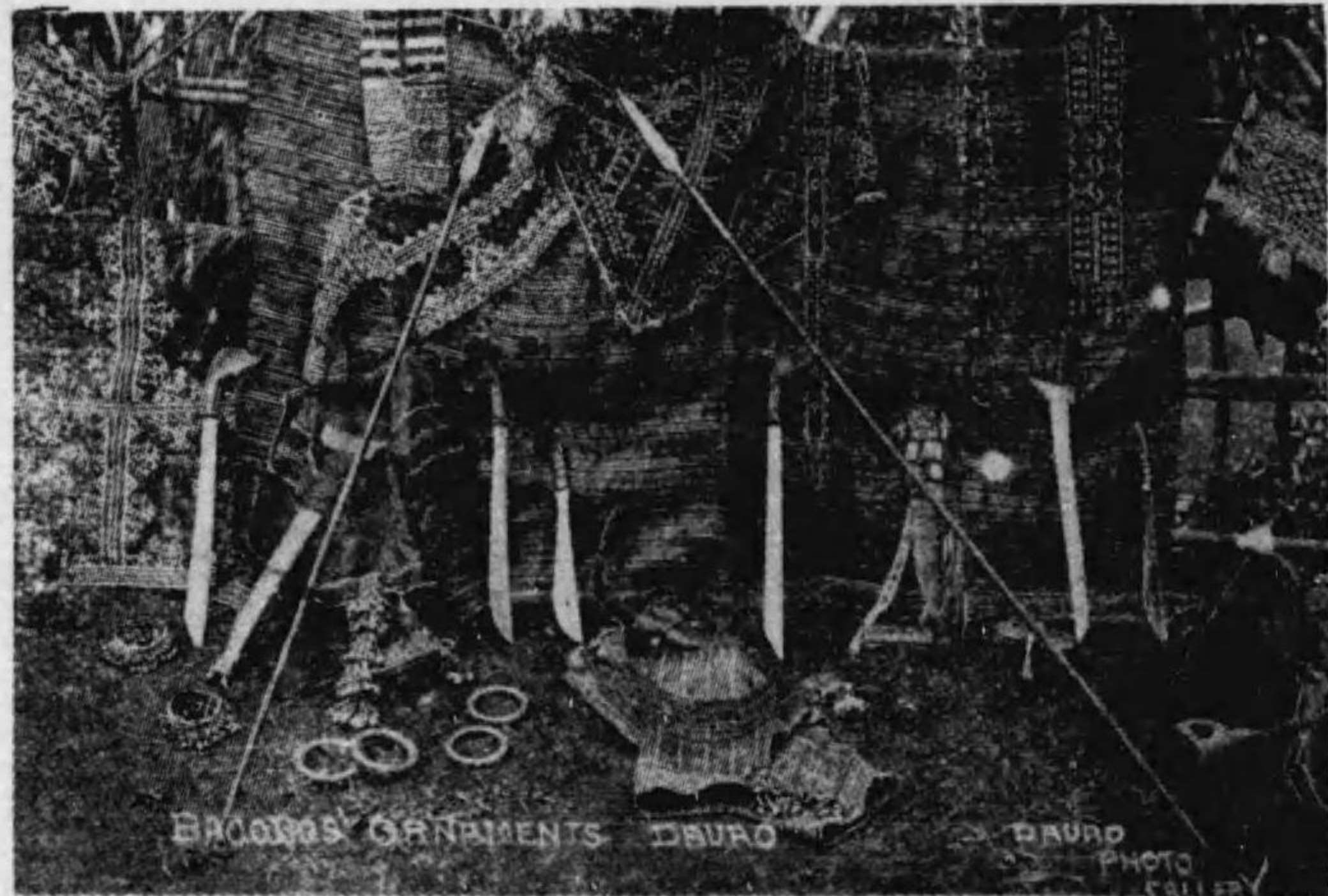
一九二五年にコンスタブラリーにうち殺されて死んでしまつたバゴボノ酋長ゴノーや、こ

れも同じ運命をたどつて行つたマノボ人の親玉マンブラの魂でも入つて、彼等が生れ變つても来たのか、新作の日頃の行動は、彼の父母には益々不可解のものとなつて行つた。彼等にはわが子が、何が面白くて、毎日／＼あの密林の中を駆けずり廻つて歩くのかからなかつた。馬一頭を數分間で倒した山蛭も、新作の身體には喰つ付かないと見える。鹿を呑んだ蛇さへ彼には飛付かいと見える。そのうち、チルライやマノボ見たいに徒足のまゝに蝮の樹のとげの葉や刈り取つた後のゴゴンの根つこの上も平氣で歩くやうになるかも知れない。

リモコンの鳥の精でもうけて生れた奴かも知らんと、父は繼母に云つたのである。

リモコンの鳥と云ふのは、チルライの守護神のやうにチルライ人に尊敬されてゐる一方、極めて怖れられてゐるものだ。旅行などする時、リモコンの鳥の聲を聞くと、前途に何か凶事が待ちうけてゐる、即ち神の御知らせと云つて引つ返して来る。それだけ、彼等に怖れられてゐるものだ。だから、多くの人々は又リモコンを凶事の象徴と思ふてゐるのもある。

「リモコンにそびかれて行つた方がましや」



バゴボ人 - 武器の器

彼の父は又母にさう云ふ時もあった。

しかし、新作は、リモコンにそびかるゝ代りに、店から金や或は麻をそびいて行つて、こつそりと賣つては、遊び廻つて歩いた。ダバオの街に出ては、ダンスホールに行つて、ピサヤ人のダンサーなどを手に入れて連れ回つたり、ピヤホールを飲んで借金して來たり、三十代以上の不良男のするやうな事ばかりして歩くのであつた。

父と母とは、相談の結果、新作に長崎から嫁を貰つてやつてはといふことになつた。それはちやうど、新作自身の希望

と一致してゐたので、彼は珍らしくオーライと答へた。
 「嫁はお前の氣に入る通りのものを貰つてやるんだから、その代り今迄通りの遊びは止める事だぞ」

「それは分らん」

「どうして分らん」

「向ふが野蠻人を氣に入るかどうか分らんじやないか」
 「勝手にほざけ！」

嫁の話をもち出して、新作を牽制しやうと彼の父は、何度も氣を引いて改心をさせやうとするのであつたが、彼の放埒はますます募る許りであつた。それほど、森林の魅力は彼を引き付けて放さなかつた。

そのうちに、長崎からは、愈々嫁が到着した。美しい立派な娘であつた。色の白い、身體の丈夫さうな、髪は黒い、鼻の高いと云つたやうに、兎に角スプレンドとストロングとおまけに、女學校を出た近代的な明朗性と、そして殖民地の生活に就いて充分理解をもつて

ゐる娘が、新作の嫁として送られて來たのであつた。その娘は、新作の現在の母の縁戚にあつたので、父も母も非常にこの嫁に期待し、新作の教化方法に對して注文もする事が出來たのであつた。

一時はミンダナオのジャングルの中の魔人かとまで思はれた新作も、この嫁が到着して暫くの間は、極めて神妙に、明朗に、温良になつて、全く人間が甦生したやうであつた。一家の中に春風が駘蕩として流れた。嫁は、有川の家太陽であつた。彼女の伶俐さは、父母を勞はり、野人新作を羊のやうによく御し、柔いこまやかな愛情でしほり、そして使用人一般にもまた全く氣うけがよかつたのである。

新作の相手になつて、レコードで踊る時もあるし、鳩うちの伴になつて、附近の森の中を駆け廻る時もあるし、兎に角、いい似合の夫婦であると、彼の父母も誇り、世間の誰彼からもお世辭でない好評を博したのである。

しかし、その幸福な日はそう長くはつゝかなかつた。ある日、リモコンの鳥が夜中けたたましく鳴いたのであらうか、いや、誰もリモコンの鳥の聲など聞いたものはなかつたの

であるが、新作が、時々家を抜け出して、密林を駆け廻る習慣が復活したのを、見たといふものが数増して行つた。わが太陽は、この一家を長くは照らさなかつたのである。

野性の愛

凡そ、文明的な臭ひのするものは、すべてが微温的で、表面的で、標準な新作の気持ちにしつくりとそぐはなかつたかも知れない。技工、作意、禮式、體裁、それ等のもの一切は、神聖なる野蠻道に反し、自然を冒瀆するものと考へたかも知れない。

日曜日が来て、鶏の賭博に行くにも、若し文明人であるならば、競鶏省でも設置し、競鶏大臣でもおいて、鶏をもつて世界統一の深遠高尚なる思想に理窟づける事も出来るかも知れない。幸にしてモーロー人に文藝家がゐなくて「鬪鶏讀本」も今の處出版されてゐない。取引所はあるが、袁玄道は許されてゐない。それが文明的であるならば、と云ふやうな新作らしい文明批評や反抗的氣分が、自然に新作を驅り立てるのか、兎に角、日曜日が来るのを待



ボゴバ族の小さな會

ちかねて、大賭博をうつために、彼は闘鶏場に走るのであつた。

軍資金などは、頭をベコ／＼下げて、卑屈な態度で、父母の前に手品を仕込まれたる小犬のやうにして貰ふ必要は全然なかつた。店の方に回頭して、番頭にピストルをつきつけければ二三百比は直ちに徴發する事が出来るではないか。或は、そこの支那人の店に駕を枉げて父が賣つたであらう。或は賣るであらうところの麻とコブラの代金を、五分や一割の値引で領收すればいいのだ。

凡そ、支那人などと云ふものは、算盤勘定にさへ合つてゐれば、水牛の鼻をひつつかんだ時と、鰐の目玉に指を突込んで玩弄すると同じく御し易いものではないか。父が、何十度支那人に豫告し、且つ警報を發して於ても、親子の間にある法律と云ふ事や、人間の愛情と云ふものについて、一冊の本を著述する位の該博なる智識材料はちやんと腹の中にストックしてゐるのが支那人である。

それでもなほ、頑迷な父が、新作に資金の道をふさぎ、經濟封鎖を敢行するならば、彼は物に夜蔭に乗じて、倉庫に入り、麻を庭にもち出し、わが經濟的盟友の支那人に渡してやれ

ばいいのだ。唯しかし窃盜とか、強盜とか、虚偽とかは元來野蠻道には相反するものとしなければならぬ。彼は、人を殺すに不意打ちをする方法さへも、唾棄すべきものと考へてゐる。

野

彼には未だ／＼高等な戰術は幾つもある、人間の智慧は搾れば搾る程幾らもあるものだ。

性

家族のすべてが、締盟して、新作に經濟封鎖を喰はした場合には、彼の母の前で、妻を虐待して見せ付けるのである。小蛇の尻つぽを撮んで来て、そら、お前これとでも寝なつと投げつけてやる。忽ち一家は大騒動だ。六踏三略、又は虎の巻は幾らもある。

の

頑迷なる父が、ヒットラー的勇氣を示し、ピストルを自分に突き付けても、彼が斷然發射し得い事は、百も承知してゐる彼だ。そして彼は、合法的に、或は非合法的にも、千變萬化の秘術を盡し秘策を練つて、軍資金を自家よりも出し、賭博と、酒と女に費してゐたのである。

愛

ある日、彼は、一週間程家を空けて、例によつて例の如く、ジャングルの群雄諸國を廻國

して歸つて來ると、倉庫の隅で、自分の妻がメソメソ泣いてゐるのを發見した。しかも、その泣いてゐる妻を、勞つてゐる父の番頭をも同時に發見したのである。

新作は、直ちに一發ズドンとぶつ放つた。姦夫姦婦を發見した以上、この一家を残らず虐殺すると怒號して、荒れ狂ふた。しかし、ピストルは二發目を發射しやうとする時に、倉庫の入口に立つてゐた力の強い日本人に引つたぐられ、つゞいて刃を抜いたが、それはピサヤの雇人に丸太棒でたゞき落とされてしまつた。

時がわるかつた、労働者等が群がつてゐる時であつたので、四方八方から寄り集つて來て新作を取り押さへ、マニラロープで手足をがんじがらめに縛つて、鶏小屋の中にほうり込んでしまつた。その父によつて、息の根を止めて仕舞へとまで人々は嚴命されたのであるが、密林の猛者も、幸にして命だけは永らへうる事になつた。

その代りに三日と三晩、鶏の糞の臭ひを嗅ぎ、幾十萬の蚊に喰はれて虐められた。こゝを出たら第一に父から、そこら中の誰彼をすべてぶつ殺すと囁鳴り散らしたのである。新作監禁の報を聞いてプアヤンのモーロー人等は、新作即ちダダは自分等の血族だ。それを、日本



あゝ族の中空住宅

12
人が監禁してゐるのはけしからんと、一味相集つて戦備を整へ、新作の父を襲撃に来るとの事であつたが、これは未然に防ぐ事が出来た。そして、新作は、四日目に、コンスタブラリに護衛されて、カラボース（刑務所）に入れられた。長期の懲役か日本に還るか二つに一つの方法を取れと宣告されて、無論日本に歸るのを希望し、それを許されて、刑務所から、日本船の船長に引き渡され、密林の猛者は長崎に送還されることになつた。無論、彼の妻とも仲良く、船の中では別人のやうに至極神妙にしてゐたのである。

「そら、これで日本に歸れただらう！」
新作は、妻の肩をたゝいて、笑つた。

著 者 附 言

著 者 此事實物語中には南北部ミンダナオ島の土人生活に就いても詳しく語る考へであつたが、それは都合上續篇に入れることとし、一般にアタと稱されて居るマンサカ、マンダヤ、マノボ、ピリヤン、チルライ等の山間民族の風俗を取り入れた。アタは、薩摩隼人の元祖、又は熊襲とその傳説や風俗が酷似し、その系統が一つであらうとの説がある。

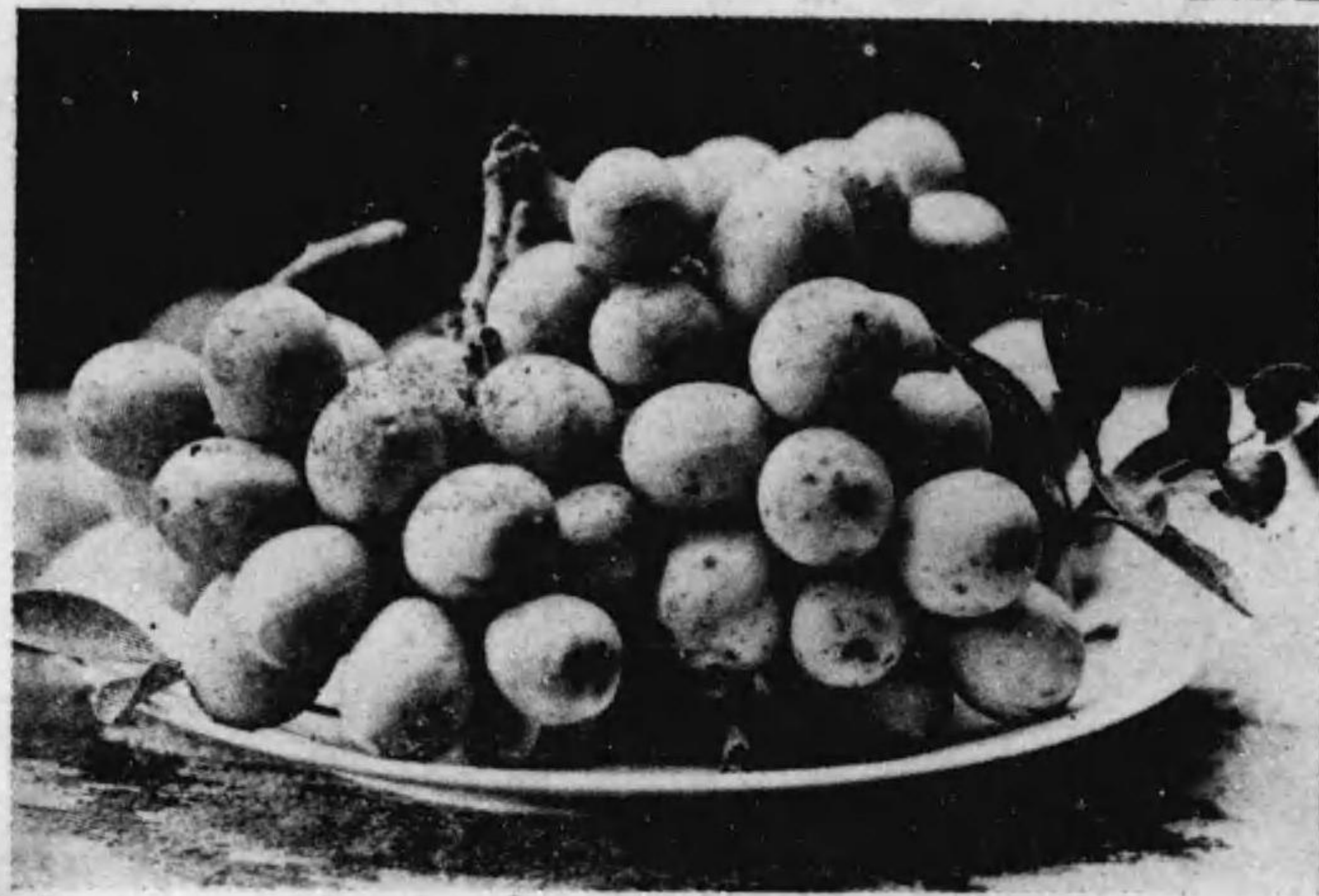
附 者 又、學者は、アタをビグミー族としてゐるが、ミンダナオ島には、ビグミー族は全然生存してゐない、アボ山やマトトム山の頂上にさへ、さやうな種族は居ないのである。この事實物語中、彼等の風俗に就いては、想像で書いたものは全然ないつもりであるが、若し、違つて居るところがあつたら、ダバオ方面の讀者から教へて頂き度いものである。

蠻
人
の
神
々

始めやうとする時にも、もしリモコンが鳴くと、その仕事に手をつけない。

彼等は便所に行く時でさへも、一時用便を中止するのである。リモコンと同じくコラゴと云ふ鳥をも彼等は又怖れてゐる。長期の旅行をしてゐる時でも、このコラゴの聲を聞くと、中止して歸つて来なければならぬ。婚禮の儀式でさへもしコラゴが鳴くと破談になる。リモコンやコラゴが鳴くと、必らず、バゴボー人の家には凶事が襲ふて来るものと信じ切つて、その聲を耳にするや、人の首を平氣で切る程の彼等が、怖れ戦いてガタ／＼顫へるのである。しかし、コラゴと云ふ鳥などは、誰もその姿を見た事はない。が彼等は實際に居ると信じてゐる。それは彼等の信仰によると、鶏のやうで非常に美麗な羽毛をもつてゐるのである。そして眞夜中、コラゴが一度鳴くと、數千メートルの彼方にまで響くとバゴボー人は云ふのである。ても恐ろしいリモコンの鳥。

梟も亦彼等バゴボー人の恐れるものの一員だ。この梟は、深山の夜をしていやが上に神秘化す立役者であるが、人はこの鳥の啼聲を、決して眞似てはならないものだ。梟は、猪の神とバゴボー人は信じてゐる、それは、梟の啼くところには、必らず猪が居るからである。



ス ネ ソ ン ラ

リモコンが、チルライの守神であると同様に、梟は、猪の守神であつて、猪の危険は、梟が啼いて知らすと、バゴボー人は解釋してゐる。深山の夜、静寂な、それは莊嚴な程の静寂な夜、たゞ梟のみが啼いて、神秘の夜の歌手として萬物の耳に幽妙なメロデーを響かす。おそらく、樹々の梢までも、その啼聲に聞き入つて、沈んでゐるかと思はれる時、その梟の啼いてゐる下には猪の群が遊んでゐるのである。梟と猪が、深山の夜の役者となつて神秘主義の芝居

むかし昔、この世界が未だ随分若かつた時代の事、マトトム火山の上にピリヤンの酋長が住んでゐた。彼の領地は廣大で、彼の財産は世界一、そして彼の娘はまた世界の誰よりも美しかった。

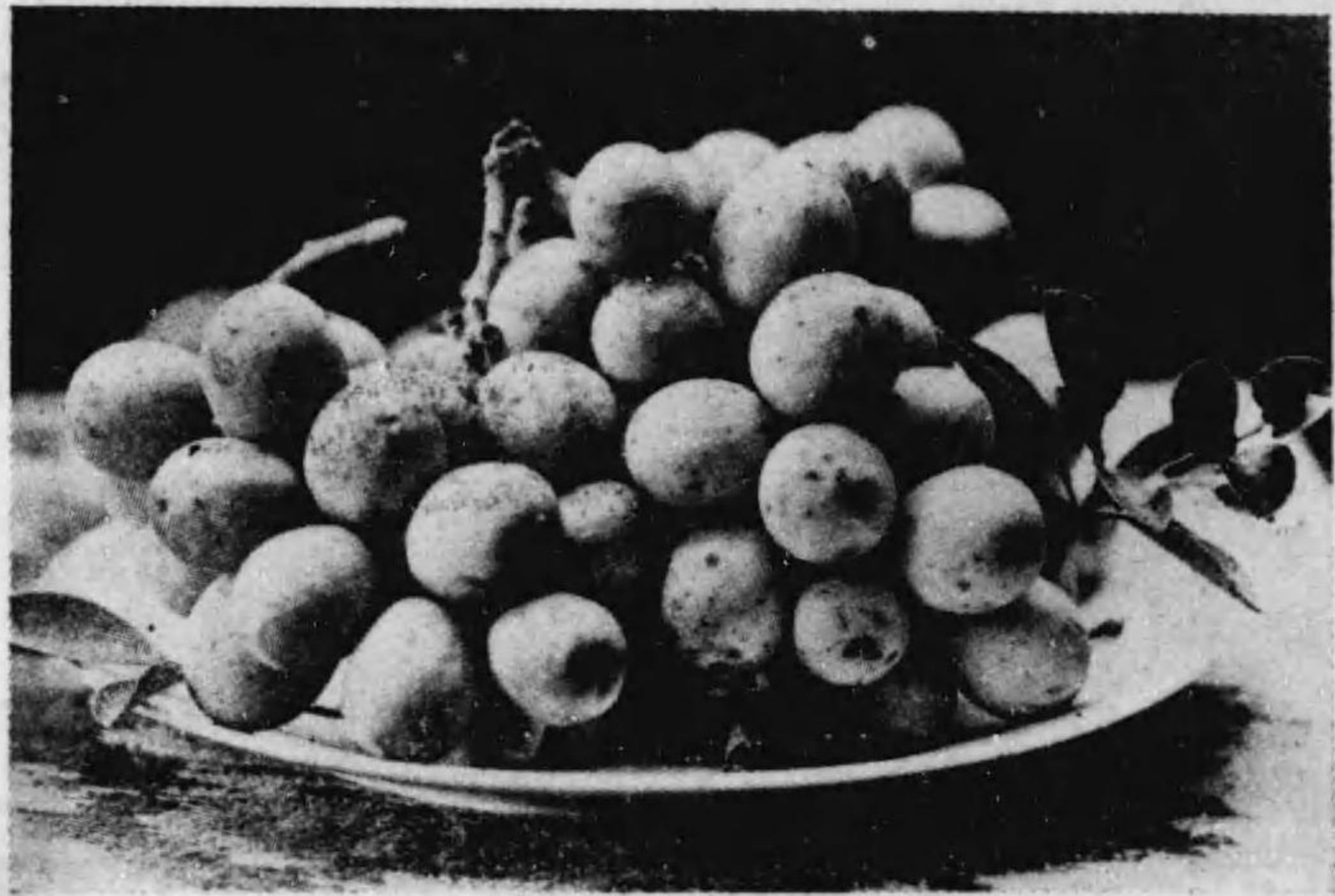
そして、ピリヤン人はまことに幸福に生活し、野山には美しい花が四時咲きさかり、小鳥は鳴き叫び、猿は笑ひ狂ひ、果物は到底食ひ盡し得ない程實つてゐた。然るにある時、彼等の平和は攪亂された。即ち外敵の不意討ちを受けて、このピリヤンの一族が危険に直面したのである。するとこの時二羽の小鳥即ちリモコンが飛んで来て、この酋長の弓に止まつて、彼にその災厄を知らせた。そのために、チルライ人は危く全滅から免れることが出来た。その時以來、リモコンは、チルライ人守護の靈鳥だと云ふので、彼等に尊敬され又怖れられるやうになつた。

4 稍、わが昔の神話に似通つてゐるが、このリモコンが、人間の運命を豫知すると信じてゐるのは、バゴポー人もまた同様である。バゴポー人は、旅行中リモコンの鳴き聲を聞くと、必らず凶事が前途に待ち受けてゐると云つて、途中から引き返すのである。また仕事をいざ

始めやうとする時にも、もしリモコンが鳴くと、その仕事に手をつけない。

彼等は便所に行く時でさへも、一時用便を中止するのである。リモコンと同じくコラゴと云ふ鳥をも彼等は又怖れてゐる。長期の旅行をしてゐる時でも、このコラゴの聲を聞くと、中止して歸つて来なければならぬ。婚禮の儀式でさへもしコラゴが鳴くと破談になる。リモコンやコラゴが鳴くと、必らず、バゴボー人の家には凶事が襲ふて来るものと信じ切つて、その聲を耳にするや、人の首を平氣で切る程の彼等が、怖れ戦いてガタ／＼顫へるのである。しかし、コラゴと云ふ鳥などは、誰もその姿を見た事はない。が彼等は實際に居ると信じてゐる。それは彼等の信仰によると、鶏のやうで非常に美麗な羽毛をもつてゐるのである。そして眞夜中、コラゴが一度鳴くと、數千メートルの彼方にまで響くとバゴボー人は云ふのである。ても恐ろしいリモコンの鳥。

梟も亦彼等バゴボー人の恐れるものの一員だ。この梟は、深山の夜をしていやが上に神秘化す立役者であるが、人はこの鳥の啼聲を、決して眞似てはならないものだ。梟は、猪の神とバゴボー人は信じてゐる、それは、梟の啼くところには、必らず猪が居るからである。



ス ネ ソ ン ラ

リモコンが、チルライの守神であると同様に、梟は、猪の守神であつて、猪の危険は、梟が啼いて知らすと、バゴボー人は解釋してゐる。深山の夜、静寂な、それは莊嚴な程の静寂な夜、たゞ梟のみが啼いて、神秘の夜の歌手として萬物の耳に幽妙なメロデーを響かす。おそらく、樹々の梢までも、その啼聲に聞き入つて、沈んでゐるかと思はれる時、その梟の啼いてゐる下には猪の群が遊んでゐるのである。梟と猪が、深山の夜の役者となつて神秘主義の芝居

を演じ、そしてバゴボー人を驚かしてゐるのは、まことに面白い光景ではあるが、文明人は決してこの芝居を笑つたり、又鼻の啼聲の眞似などしてはならないものだ。

「リモコンを撃つてやろうか」

と假りに私がかつたとすれば、きつと彼等は、私の首を取らうとするであらう。バゴボー人は、遊戯とか、洒落とかを知らない至つて陰氣な民族である。彼等は、明朝、輕快、滑稽、ユーモア等の全然缺けた民族である。彼等はモロー人的の武士的氣魄さへなく、極めて卑怯と陰慘な性質を多分に所持してゐる。

戦争等に於ても、モロー人の多くが、堂々と戦はうとするのに反して、バゴボー人の戦は、不意打ちと夜襲を常とする。首取りの時間も、早朝か、夕方かを選ぶのである。人間は朝は自然に氣分が落ち付き、そして油断をするものであるし、夕方は、疲勞してつい防敵の用意が缺ける、その頃を見すまして、彼等は人の命を落とすのである。これはおそらく、祖先以來の久しい經驗によるものであらう。

バゴボー人は、人の命をよく取りたがるが、なぜ彼等が人命を取るか。日本人でもおそら



ホロの前大會長

く二千人以上、彼等の蠻刃の錆となつて消えたであらう。彼等は、自分の子供が死ぬと、あの世への道案内に人の命を取るのである。そして自分の子供が寂しくないやうにと、命を取つた人間の指をその子供の墓に葬る。もしも酋長が死ぬと、二三人はお伴として、あの世へ行かなければならないのである。

南洋千一夜物語

ミンダナオの原始林は、晝なほ暗い迄に巨木大樹が繁り合ひ、無数の鳥、猿猴の類が棲息し、一種の神秘感と、原始的なるものの威壓が人間に迫つて来る。彼等住民は、幾千年間こゝに住み、こゝを家としてゐる。そして谷一つ超え、山一つ隔てると異つた民族が棲息してゐるので、何時その異邦によつて自分等の生命が、失はれないとも限らない。自然、陰鬱と猜疑、嫉妬心の強い民族が出来上つて来たのかも知れない。殺伐を好み、勇敢なる半面には極めて卑屈の氣風と、自然に對するもの怖れをする念が極めて深い。迷信が巢食ふわけである。

夫婦喧嘩をして、女房に罵られ、意氣地が無いと云はるれば、彼等の勇士は、直ちに鎗と蠻刃を提げて、他部落へと遠征し、その男の首を土産にもつて歸つて来なければならぬ。



いのである。

「どうだ、これでも意氣地ないか？」

バゴボー人の山の神は、こうした時ニコリと笑つて、宿六氏の武勇をたゞへ、愛撫の限りを盡すのである。古往今來、東西又は文明と野蠻とを問はず、妻が夫を罵る文句は、卑怯又は意氣地なしと云ふのが、最後の投げ言葉であるやうだ。そこでもし文明都市のハズ諸公が憤然飛込んでゆくところが、カフエーか麻雀クラブかダンスホールか撞球場か等々であるとすれば、なるほどバゴボー蠻人共とは全く大變な相違である。

さて激昂し、興奮し、直ちに敵人の首を掻き切る程のバゴボー人の勇ましい姿も、リモコンの聲一度密林の彼方から傳つて來ると、手足も縮かむ程恐怖するのである。

リモコンは、彼等の運命を豫知する怪鳥であるが、鷄も亦、彼等に種々な事を知らして呉れる。牝鷄は時として、その自分の卵を食ふ時があるが、かやうな場合、バゴボー人は、甚だしい凶事として、その自然に反した行爲者たる牝女をうち殺さねばならないのである。牝女を告げる時も、バゴボー人の社會に於ては、極めて不吉な事なのである。かやうな場合



名花ワリワリ

この牝鷄は當然自然の反逆者として死刑をもつてその罪を償はなければならぬ。女が男の領分に這入る事は、この原始社會に於ては最も忌み嫌はれるものらしい。

彼等は又、山猫と鹿とが、彼等の開墾場に入つて來た時、これ又不吉なこととして如何に肥沃な、そして久しい時日を費して開墾して來た土地であつても、惜し氣もなく放棄するのである。しかし、たゞ、山猫と鹿の類が、彼等の目に入りさへしなければいい。

祝事の時、器物の破損するのも、彼等は極めて凶事として怖れる。もし、結婚式等

の場合、血鉢の類が毀れると、この結婚も何か不吉の兆があると思つてゐるので、魔除けの祈禱を捧げなければならぬ。かうした種々様々の迷信や戒律が、彼等の生活を規矩してゐるから、その悪魔拂ひ、神の許しを乞ふ祭事、祈願等が、又なか／＼盛んである。

バゴボー人の神は、その数がなか／＼多い、最高位の神は、マナマである。マナマの神は天界にいつも存在してゐる、そして、この神は宇宙の創造者であるから、全世界はその支配を受けるものと信じてゐる。

マナマ神宇宙を創造した後、ボムラマノボと云ふ神を呼んで、汝下界に降つて行つて國土を經營せよと命じたので、ボムラマノボの神は、サレヤカン、シンドマゲン、ママダダシ、タラバツバツ、キナワダン、モグラリン、リヤクサアン、マラキスー、ラツカーブーラン、タカレの九柱の神を従者として下りて來て、アボ山の中麓シブラン河の上流を、世界經營の總本部として定めた。

そして、ボムラマノボ神は「汝等九柱の神、おの／＼その能力に相應して、此國土を完全に經營せよ」と委任し、再び天界に歸つて行つた。そして、マナマの神に、その使命を果た



人 類 の 一 部

した事を報告したのである。

「理想的の殖民地であります。土地を肥やし、樹木は天まで届くまで延びさせ、アポの山からは煙を吹かし、シブランの河からは、美しい水の流れるやうに、工事を進めさせる事にしました」

と告げると、マナマ神は至極喜こばれたのであつた。

ボムラマノボ神の下には又、カラヤガン、ダムリヤン、バモボン、カモトアン、パネテの神々がゐて、傳令の係りをつとめ、下界九柱の神々と常に連絡しながら、國土經營を完全にすべく勤めたのである。

下界の經營を委仕された九柱の神が、シブラン河を中心として、理想的の植民地呑植神地をうち樹てやうとして、その地勢について大いに研究してゐる時、偶々、タカレン、タカランバ、バレノンノクと云ふ三柱の神が、そこらに先住してゐるのを發見した。この三柱の神は、極めて邪惡な神であつて、そして、喰人呑喰神で、際さへあれば、九柱の神の首をうち落として、喰はう喰はうとばかりしてゐるのであつた。

だから下界の人間共は、この九柱の善神によつてつくられたのであるが、もし彼等が悪事をなし、もはや奴は見込がないとこの神々から見放された時は、この邪惡の神の支配下に移らなければならないのである。

又、マンダラガン、ダラゴと云ふ畏ろしい夫婦神が、アポ山の火口に鎮座してゐて、アポの噴火を司り、そして殺人の権利もこの神が握つてゐると云はれてゐる。だから、バゴボ人は、今でも、殺人を執行しようとする時は、この殺人係りの二柱の神の神意を伺ふのである。

殊にダラゴ女神は非常に権利が強く、裁決をするのにもマンダラガン男神よりは上位である。人間より、殺人の願意が届いた時は、この二柱の神は會議を開くのである。

この會議中、殺人志願人は、アポ山を伏し拜んで、只管に其の許しを待つのである。即ち彼は耳を傾けて謹聽する。若し、アポの噴火口に遠雷のやうな幽かな響きがあつた時は、殺人は許されたのであるが、大音響を發し爆音を附近に立てた時は、殺人の御許しはないのである。

神に許されない殺人は、決して成功するものではない。いかに、人命が必要な時でも、神意に叛いて敢行しやうとする場合は、神の祟りを受けなければならぬ。
 パゴボー人は、かうして、神を畏れ、神意に従つて行動するのであるが、生前善行を積んで置くと神に召されて昇天し、神の使者となる事が出来るといふのである。

虐げられる者の爲めに (巻末一言)

もしも強き者が弱き者を虐める権利があると云ふならば、もしも榮える者が衰ふる者を嘲る権利があると云ふならば、しかもわが身でわが血を汚濁に浸ましてよしと云ふならば……それは野蠻である、野蠻であると云ふべきだ。

野蠻とは何事か、野蠻人とは何物か、人を殺し、ものを盗み、着飾り、富を貯へ、欺き偽り、ものの哀れを知らず、正しき事と悪しき事のけじめを知らざる行爲と行爲者であらう。
 密林の中の自然生活者！ 彼等こそ野蠻人と呼ぶべきか、珊瑚礁の上の裸像群！ 彼等こそ野蠻人と稱すべきか。乞食、自殺者、殺人、強盗、戦争等の絶えざる社會を野蠻社會と謂ふ可きか、野蠻と文明の境界點は何處にあるか。

南太平洋の島々には、多くの野蠻人？ が居た、白色の文明人が襲來して來て、彼等の大多數を殺戮し、彼等の土地と物を剥ぎ取り、病毒を撒布し、そして、彼等の婦女子に子を産

まじめた。野蠻よ、野蠻よと鬼のやうな聲を出してカラ／＼と笑ふた。何ちらが野蠻？ 何ちらが野蠻——？

おらん・うーたん(類人猿)の昔から、人間はいろ／＼の進化を経て來た。今も未だ進化の道中なのだ、後れたるものを野蠻と嘲る勿れ、後に來るものを未開と罵じるを止めよ。神の選民文明人よ、そして先進國よ、彼等の手を引き、彼等を導き、彼等を愛せ——。

俺は神人、俺は文明人、俺は一等國民だと威張りに威張つてゐても、神人の領土は狭く、文明人の食物は乏しく、一等國民の慈愛心は餘りに薄弱だ、だから、野蠻の領土に、野蠻の食物を、野蠻の愛を求めねばならない。野蠻も亦文明人に必要な存在物なんだ。

神人、文明人、一等國民等が進出する未開の國々——即ち、彼等が稱する野蠻國に於て、その婦女子に子を産ませしめる、そしてその後始末に極めて怠慢なのは、それは文明人的道德であるか、野蠻的行動であるか。

尙それよりも、路傍にうち捨てられたる自分の同胞の血の流れを指して、嘲り罵じる行爲者は文明人であるか、野蠻人であるか。猿の尻笑ひよりも、人間の尻笑ひがおかしくはなからうか。

らうか。

殖民政策に極めて下手な人々は、所謂野蠻とか未開人に對する考へ方が足りない。同情が乏しい。彼等に對する人間の理想が全然ない。吾々は、右も左も、南も北も野蠻に包圍されてゐる。文明の假面を被てゐる野蠻人や、密林の自然生活者や。

だが、吾々は、眞の人間、理想的な社會を建設する爲めに、野蠻を學び、そして文明を自省しやう。

昭和十二年春

東京にて

著

者

識

著 允 久 翁

釋迦如來

著者が印度の佛蹟を巡
錫中構想を築き詩藻を
著へ歸朝後一年の歲月
を費し完成せる大戯曲

(定價 一圓二十錢)
(送料 十錢)

黒木謹質 著

(定價 八十錢)
(送料 六錢)

配色テキスト

色彩の根本原理を面白く分り易く説明し
日常生活のあらゆる分野に應用自在の配
色法を現色見本をもつて親切に教へる

昭和十二年三月一日印刷
昭和十二年三月五日發行

定價五拾錢

南洋千一夜物語
附 奧

著者	仲原善徳
發行者	花田幸子
印刷者	大塚松之助

發行所

東京市麻布區飯倉五丁目十番地

日本書房

振替東京八三一三八番

東京市澁橋區柏木一丁目百三十番地

海外發賣所

南洋通信社

振替東京七五〇一〇番

昭和二十年年度版

比律賓年鑑

大谷純一編

附、在留邦人名選

銀行・會社 商店・一覽

在マニラ總領事 内山清氏序
 財團法人 比律賓協會序
 在マニラ副領事 木原次太郎氏寄稿
 三井物産 河村雅次郎氏寄稿
 マニラ支店長
 橫濱正金銀行 大宰正伍氏寄稿
 マニラ支配人

- ▲第一篇 政治及一般事情
- ▲第二篇 金融・財政・産業
- ▲第三篇 比島海外貿易
- ▲第四篇 在留邦人現狀
- ▲第五篇 附錄

定價 三圓也

比價 二比

東京市澁橋區柏木一丁目一三〇

南洋通信社 振替東京七五〇一〇番
所賣發地内 東京替振番〇一〇五七



南洋各地と祖國との……

唯一の相互通信機關

◇植民・貿易・在南邦人の近況は本紙に據つて識れ！
 ◇確實なる現況を闡明して將來の對策に資せよ！

唯一の指針 絶對の權威

毎月一回十五日發行

(但シ適宜臨時増刊ノ發行有リ)

定價 日本内地 月參拾錢
 布哇年 年參拾錢
 比律賓年 年參拾錢
 海峽植民地年 年參拾錢
 蘭領東印度年 年參拾錢

發行所 東京市澁橋區柏木一ノ一三〇
南洋通信社

社長 仲原善徳

振替東京七五〇一〇番
 郵函・澁橋・二七號

支局・サイパン・マニラ・ダバオ、
 其他南洋主要地

終

